

がんばる「市民発電」

ご当地エネルギーはいかが？① 「宝塚すみれ発電」の挑戦

「脱原発」を求めた結果、自ら発電所を立ち上げた「宝塚すみれ発電」の井上保子さんたち。チェルノブイリ事故から30年、福島事故から5年の今、どんな思いを抱いているのか。



宝塚すみれ発電（上）
井上保子社長（右）

先日、福島から避難していた女性が甲状腺がんの手術を終え退院してきた。事故の前から患っていたのが、事故の影響なのか、今となっては分からない。ただ、甲状腺の摘出による影響はこれから一生続く。体が冷え込み様々な余病を引き起こすため、薬を飲み続けなければならぬのだ。「彼女だけではない。福島は終わっていないところか、これから本番。何が起きるのかわからない。福島はチェルノブイリを上回る恐れすらある」

井上さんが、チェルノブイリ事故に関心を抱いたのは、今の会社のパートナーである中川慶子さんとの出会いが大きい。中川さんの夫、故中川保雄さん（元神戸大学教授）は科学技術史が専門で、「反原発科学者連合」のメンバーとして活動、「原発の危険性を考える宝塚の会」を立ち上げ市民運動にも力を注いだ人物

だ。中川教授だけでなく、色々な学者たちから学んできた。それだけに今は、現役の学者たちに対する苦言が漏れる。「こんな大変なときに、少しも声を上げないなんて、一体何を考えているのか」

「マスコミは

ありのままの

事実を伝えて」

井上さんの批判の矛先は、「マスコミ」に対して向けられ、その視線は厳しい。テレビを見なくなっ

てから、もう20数年のままで事実を伝えてほしい。あとは自分たちで考え、判断する。それができないほど市民はバカではない」

厳しい現実から

目をそらしたほうが

楽だけど……

そして、井上さんは、自らを含め市民サイドにも注文をつける。「事故から5年経って、『もつ面倒、飽きた』という声を聞くことがある。考えなくなっている人が増えている。確かに厳しい現実からは目をそらしたほうが楽。でも、例えば震災関連死」という名の自殺者、原発周辺地域で死産が目立っていること、子供たちの活

動の場が制限され、それが目に見えない精神的・身体的な被害をもたらしていること。これらの事実を決して見過ごせないはずだ」

自らを「目立つのが嫌いで縁の下の方が理想」という井上さん。しかし、今のまにか旗振り役をまかされていた。今は、「有言実行」を胸に刻み、「覚悟をもって生きる」と決意している。（おわり）



社内で若手社員らと意見を戦わせる